

令和4年度 総合部会研究計画

1 研究主題

自己の生き方を考えていく資質・能力の育成
ー探究的な学習の質を高める協働的な学びの充実ー

2 研究主題について

(1) 主題設定の理由

総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標としている。そして、探究的な学習の過程を一層重視し、各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活の中で活用できるものにするとともに、各教科等を超えたすべての学習の基盤となる資質・能力を育成することが求められている。

これまでの研究の結果、問題をよりよく解決するために、子供は地域と関わり、体験活動を行い、多くの人と出会い学ぶ過程で、実際の社会や生活の中で活用できる資質・能力を身に付けていくことが分かった。また、探究的な学習が発展し続ける単元づくりをすることで、納得するまで課題を追究し本気になって考え続ける子供の姿が見られた。しかし、総合的な学習の時間の課題として挙げられる「活動あって学びなし」とならないためには、子供も自己の成長に気付くなど、自己の生き方を考えていく資質・能力を培う必要があると考えた。

令和3年度の生活・総合研究大会会場校の徳島市加茂名南小学校では、研究主題「加茂名南再発見！『つながる学び』で育む未来を拓く子ども」のもと実践を行った。その成果として、他者と協働し、すぐには明らかにならない課題や正解が存在しない課題に、粘り強く取り組もうとするなどの子供の姿が見られた。また、「育成を目指す資質・能力」を明確にし、人や地域とのつながりや体験を見通したカリキュラム・マネジメントを実施することなどから、探究の過程をつなげた深い学びになっていたことを実感できた。

総合的な学習の時間とは、「人の営みや思いに気付く、自身もその中で生きる一人であることを実感し、生活を豊かにするために、自己の生き方をよりよくするために必要なことを考える時間」とされている。これらの過程で育つ力が、未来を拓く資質・能力につながっていると考える。これらのことを踏まえ、本部会においては、今年度も「自己の生き方を考えていく資質・能力の育成」を主題に、研究を進めていくこととする。

(2) 主題についての考え方

協働的な学びとは、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、持続可能な社会の創り手となる資質・能力を育成することである。また、探究的な学習とは、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく学びの在り方であり、その中で探究的な見方・考え方を働かせることが必要である。探究的な見方・考え方とは、各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会や実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続けるという総合的な学習の時間の特質に応じた見方・考え方である。さらに、自己の生き方を考えることについては、次のように示されている。

- 自らの生活や行動について考える
- 自分にとっての学ぶことの意味や価値を考える
- 学んだことを現在及び将来の自己の生き方につなげて考える

そして、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、異なる多様な他者と協働して、主体的に課題を解決することで、探究的な学習の質を高め、実際の社会で活用できる資質・能力を育成していく。

3 研究内容

(1) カリキュラム・マネジメント

今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 p61～参照

総合的な学習の時間は教科書がないため、各学校において定める目標や内容に基づいた「何を学ばせたいか」を明確にし、資質・能力を具体的に示す必要がある。探究課題は「何について学ぶか」を表し、資質・能力は「具体的にどのようなことができるようになるのか」を表している。各学校は、全体計画及び年間指導計画、単元づくりにおいて、カリキュラム・マネジメントを通して地域や行事、各教科とのつながりを生み出し、資質・能力の育成を図ることが求められている。

① 全体計画作成の進め方

- ・各学校における教育目標を確認し、各学校において定める目標を設定する
- ・地域や学校の特色、子供の興味・関心に基づく探究課題を設定する
- ・探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力を三つの柱に沿って示す

探究課題の例		
横断的・総合的な課題・現代的な課題	地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観(国際理解)	地域や学校の特色 に 応 じ た 課 題
	情報化の進展とそれに伴う日常生活や社会の変化(情報)	
	身近な自然環境とそこに起きている環境問題(環境)	児童の興味・関心 に 基 づ く 課 題
	身の回りの高齢者とその暮らしを支援する仕組みや人々(福祉)	
	毎日の健康な生活とストレスのある社会(健康)	
	自分たちの消費生活と資源やエネルギーの問題(資源エネルギー)	
	安心・安全な町づくりへの地域の取組と支援する人々(安全)	
	食をめぐる問題とそれに関わる地域の農業や生産者(食)	
	科学技術の進歩と自分たちの暮らしの変化(科学技術)	
	など	

② 年間指導計画の作成

- ・子供の学習経験やその経験から得られた成果について事前に把握し配慮すること
- ・季節や行事などの適切な活動時期を生かすこと
- ・各教科等の関連を明らかにすること
- ・外部の教育資源の活用及び異校種の連携や交流を意識すること

③ 単元づくりの留意点

ア 子供の関心や疑問を生かした単元の構想

- ・子供の関心や疑問が本人にとって切実なものであること
- ・教師の働きかけを通して子供に新たな関心や疑問をもたせる
- ・価値ある学習に結び付く見込みのあるものを取り上げる

イ 教師が意図した学習を効果的に生み出す単元の構成

- ・拡散的に探索する手法を用いる等、十分な教材研究を行う
- ・学習の展開における子供の意識や活動の向かう方向を的確に予測する
- ・社会資源、専門家、関連機関などについて十分に把握し、タイミングよく出会わせる



図1 カリキュラム・マネジメントの側面と視点

カリキュラム・マネジメントの三つの側面として、カリキュラム・デザイン、PDCA サイクル、内外リソースの活用があり、それらをつなぎ機能させる視点を表した(図1)。社会に開かれた教育課程の実現に向け、地域の「人・もの・こと」を生かした単元づくりをすることで、地域発信型から地域活性化型にシフトしていくことも考えられる。さらには、with コロナにおけるカリキュラム・マネジメントとして、地域の概念を広げていけるのではないだろうか。インターネットなどを活用して、遠くの地域の学校と交流を行う場面や専門家と情報発信を行う場面など、目指す資質・能力を明らかにし、実効性のある、よりよい運用の形を模索していく必要がある。

(2) 探究的な学習指導

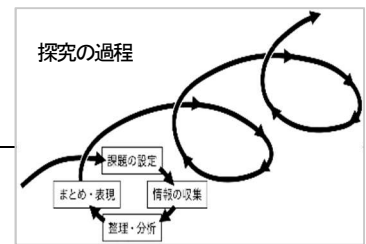
今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 p19～参照

探究的な学習では、次のような子供の姿を見いだすことができる。事象を捉える感性や問題意識が揺さぶられて、学習活動への取組が真剣になる。身に付けた知識及び技能を活用し、その有用性を実感する。見方が広がったことを喜び、更なる学習への意欲を高める。概念が具体性を増して理解が深まる。学んだことを自己と結び付けて、自分の成長を自覚したり自己の生き方を考えたりする。

そして、探究的な学習の一層の充実を図るためには、①学習過程を探究的にすることと、②他者と協働して主体的に取り組む学習にすることが求められている。

① 学習過程を探究的にすること

探究の過程		配慮すること
課題の設定	子供に切実な課題意識をもたせる	・人、社会、自然に直接関わる体験活動を重視し、学習対象との関わり方や出会わせ方を工夫すること ・事前に子供の発達や興味・関心を適切に把握すること ・これまでの考え方との「ずれ」や「隔たり」、対象への「憧れ」や「可能性」を感じさせること
	課題の解決に必要な情報を収集する	・学習活動によって「数値化した情報」、「言語化した情報」、「感覚的な情報」など、収集できる情報に違いがあることを意識すること ・課題解決のための情報の収集を自覚的に行うこと ・収集した情報を適切な方法で蓄積すること ・各教科で身に付けた資質・能力を発揮して情報を収集すること
整理・分析	整理・分析を通して思考する活動へ高める	・子供自身が情報を吟味すること ・どのような方法で情報の整理や分析を行うのかを決定すること ※思考ツールの活用や各教科との関連を図ることを意識する
	まとめ・表現	・相手意識や目的意識を明確にしてまとめたり、表現したりすること ・情報を再構成し、自分自身の考えや新たな課題を自覚できるようにすること ・伝えるための具体的な方法を身に付け、目的に応じて選択して使えるようにすること ・各教科等で身に付けた表現方法を積極的に活用すること



② 他者と協働して主体的に取り組む学習にすること

重視する活動	価値
多様な情報を活用して協働的に学ぶ	体験活動で入手した多様な情報を出し合い、情報交換しながら学級全体で考えたり、話し合ったりして、目的や課題を明確にしていくことができる。
異なる視点から考え協働的に学ぶ	物事の決断や判断が迫られるような話し合いや意見交換を行い、異なる視点を出し合い検討していくことで、事象に対する見方や考え方を深めることができる。
力を合わせたり交流したりして協働的に学ぶ	集団で学習活動を進めたり、地域の人たちと交流する機会を設けることで、一人ではできないことを実現できたり、社会参画の意識を目覚めさせたりできる。
主体的かつ協働的に学ぶ	目的や内容、方法が子供の中で繰り返し問われることで、自らの活動を振り返り、その価値を確認することや学習に対する自信にもつながることができる。

探究的な見方・考え方を高めるには、一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせられ、よりよい学びを生み出していく協働的な学びの充実が大切である。

探究的な学習を実現するためには、子供に学習の基盤となる資質・能力の育成が必要である。教科等の知識や技能に加えて、情報をうまく扱うためのプログラミング的思考などの情報活用能力やその中の要素である思考スキル（考えるための技法）を活用していくことも示されている。これらを探究の過程における実際の収集・整理・発信などの場面を通して、自在に選択し活用することで、探究的な学習が充実していく。また、探究的な学習では、子供それぞれの学習課題や目標、学習の進度、方法が異なることが想定される。しかし、探究的な学びを実践するということは、子供に好き勝手にやらせるということとは異なる。個別最適な学びの実現に向けて、「教師がどう教えるか」ではなく「子供たちがどう学ぶか」という観点に立ち、そこから授業の在り方を見つめ直せるのではないだろうか。

(3) 学習評価

「指導と評価の一体化」ための学習評価に関する参考資料 p43～参照

学習評価は、教師が指導の改善を図るとともに、子供が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするものである。そのためには、学習評価の在り方が重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性をもった形で改善を進めることが求められている。そして、各学校において定める目標に示された資質・能力を踏まえ、目指すべき子供の姿を具体的に想定した単元の評価規準を次のポイントを参考にして作成することが考えられる。

視点		評価規準作成のポイント
知識・技能	①概念的な知識の獲得	事実に関する知識を関連付けて構造化し、統合された概念的な知識を獲得している姿を設定。 例「みどり川の生物は、互いの特徴を生かし、周りの環境と関わって生きていることを理解している」など
	②自在に活用することが可能な技能の獲得	技能が特定の場面や状況だけでなく、日常の様々な場面や状況で活用可能な技能として身に付いているか、具体的には技能がいつでも、滑らかに、安定して、素早く行われているなどの姿を設定。 例「ウェブサイトから、検索ソフトを使って、短い時間にたくさんの情報を収集している」など
	③探究的な学習のよさの理解	探究的な学習のよさの理解として、資質・能力の変容を自覚すること、学習対象に対する認識が高まること、学習が生活とつながることなどを、探究的に学習してきたことと結び付けて理解しているなどの姿を設定。 例「環境と自分の生活のつながりは、探究的に学習してきたことの成果であると気付いている」など
思考・判断・表現	①課題の設定	実社会や実生活に広がっている複雑な問題に向き合って、自らの力で解決の方向を明らかにし、見通しをもち計画的に取り組むこと。 例「複雑な問題状況の中から課題を発見し設定する」 「解決の方法や手順を考え、確かな見通しをもって計画を立てる」など
	②情報の収集	情報収集の手段を意図的・計画的に用いたり、解決の過程や結果を見通したりして、多様で効率的な情報収集が行われるようになること。 例「情報を効率的に収集する手段を選択する」 「必要な情報を多様な方法で収集し、種類に合わせて蓄積する」など
	③整理・分析	収集した情報を取捨選択すること、情報の傾向を見付けること、複数の情報を組み合わせて新しい関係を見出すことなど。 例「異なる情報の共通点や差異点を見付け、関係や傾向を明らかにする」 「事象を比較したり関連付けたりして、確かな理由や根拠をもつ」など
	④まとめ・表現	整理・分析した結果や自分の考えをまとめたり他者に伝えたりすること、振り返ることで対象や自分自身に対する理解が深まることなど。 例「相手や目的に応じて効果的な表現をする」 「学習を振り返り、自己の成長を自覚し、学習や生活に生かす」など
主体的に学習に取り組む態度	①自己理解・他者理解	例「自分の生活を見直し、自分の特徴やよさを理解しようとする」 「異なる意見や他者の考えを受け入れて尊重しようとする」など
	②主体性・協働性	例「自分の意思で目標に向かって課題の解決に取り組む」 「自他のよさを生かしながら協力して問題の解決に取り組む」など
	③将来展望・社会参画	例「自己の生き方を考え、夢や希望をもち続ける」 「実社会や実生活の問題の解決に、自分のこととして取り組む」など

評価規準に従い指導と評価の一体化を図る PDCA サイクルを機能させることで、探究的な学習の一層の充実を図ることができる。また、子供の学びの深まりを把握するために有効な評価方法とされているポートフォリオ評価やパフォーマンス評価なども活用し、信頼される評価や多様な評価、過程の評価を適切に実施していくことが求められている。さらに、観点別学習状況の評価や評定には示しきれない子供一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価する個人内評価では、感性や思いやりなどの非認知能力の視点を教師がもち、子供が学習したことの意義や価値を実感することができるよう、日々の教育活動の中で子供に伝えていきたい。

引用文献 平成 29 年 7 月 小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 総合的な学習の時間編
 令和 2 年 3 月 「指導と評価の一体化」ための学習評価に関する参考資料 小学校総合的な学習の時間
 令和 3 年 3 月 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開
 令和 3 年 11 月 第 30 回 全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会大阪大会要項